

地域コミュニティへ広がる学校の探究

—隠岐島前教育魅力化プロジェクトに着目して—

1. 研究の目的
 2. 研究の方法
 3. 高校の概略と教育魅力化プロジェクト
 - 3－1. 海士町の紹介
 - 3－2. 隠岐島前高校について
 - 3－3. 隠岐島前教育魅力化プロジェクトについて
 4. 研究対象（隠岐島前教育魅力化プロジェクト）の分析
 - 4－1. 概略
 - 4－2. 隠岐島前高校のカリキュラムマネジメント
 - 4－3. 探究学習
 - 4－4. 教育寮について
 - 4－5. 公立塾について
 - 4－6. カリキュラム構想
 5. まとめ
 - 5－1. 自治体（海士町）の魅力化
 - 5－2. 成果と課題
 - 5－3. 結論
- 引用文献・参考文献

京都教育大学大学院 連合教職実践研究科
教職実践専攻 学校経営力高度化コース
186049 遠藤 公男

1. 研究の目的

2015 年 12 月 21 日、中央教育審議会は「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について」において、日本全国の各地域で、コミュニティスクールを総合的に推進していくための施策を答申した。

本論は現在、普及定着過程に在る「地域コミュニティへ広がる学校」とはどのような学校であるのかを明らかにすることを目的としている。その可能性を確認的に検討するために、「隠岐島前教育魅力化プロジェクト（同プロジェクト）」に着目して研究対象とした。同プロジェクトは、地域の過疎化・少子化により廃校の危機にあった島根県立隠岐島前高校を起点にし、地元三町村、学校、地域住民、各種団体等が一丸となって取り組む「魅力的で持続可能な学校と地域をつくる」事業を指す。学校は、子どもに何を教え、何を学ばせるべきなのか。この「何を」の教育内容を、子どもの必要と社会的必要に基づいて考え、吟味し、評価するのが、同プロジェクトにおけるカリキュラム構想の基本的課題であると考えている。

私は、これからの社会を予想し、子どもに身につけたい力を考えていく時、単に学校の仕組みを改善していくという方法だけでは対処に陥り、無意味になってしまうのではないかと考えている。予測困難な社会の中で生き抜く力を身につけるためには、子どもも大人も「人として自立」していくこと、その「自立を生み出し支える集団・組織・社会」であることが大切である。そしてそのために必要とされるのが「探究学習」である。2022 年度から使われる高校の教科書が、課題を調べて考える課題解決型の探究学習を重視した内容に変わる。高度情報化にグローバル化、さらに感染症の蔓延も加わり、将来の日本、そして世界の姿を見通すのは容易ではない。高校の新学習指導要領は、こうした時代状況を背景に多様な人々と協働しながら変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となる人材を育てることを教育の目標に掲げている。

私は、現代の様々な教育問題を減少させるためには地域と関係を持ち、「協働」しながらカリキュラムを構想して実践していくことが重要であると考えている。地域コミュニティへ学校を広げていくためには、地域資源の活用、その中でも人的資源を活用していくことが大切である。特にここに焦点を当て、論述していきたい。

2. 研究の方法

研究の方法は、フィールドワークを中心とした。現地訪問をして、そこでの参与観察や聞き取り調査、インタビュー調査などを基に研究活動を進めた。またオンライン学習会にも参加した。そこに質問紙調査などを加味して考察を進めた。

調査対象は、「隠岐島前教育魅力化プロジェクト」と、同プロジェクトに関わるメンバーを対象とした。具体的メンバーは、海士町役場職員、隠岐島前高校（同高校）関係者、隠岐島前高校生、隠岐ノ國学習センター（公立塾）関係者、後鳥羽院資料館職員、村上家資料館職員、隠岐神社職員、旅館関係者（島親）、インターンとして働いている大学生などであり、私自身の現地フィールドでの参与観察も加え、同プロジェクトを考察した。

私は、2019 年 8 月の海士町視察調査（フィールドワーク）の後、「魅力化応援団」に入団した。それ以降 2 年余りの間、幾つかの取組に参加しながら継続的に参与観察を続けてきた。

3. 高校の概略と教育魅力化プロジェクト

3-1. 海士町の紹介

隠岐島前高校のある海士町（中ノ島）は、江戸時代は北前船の拠点港であった。対馬海流の影響を受け豊かな海産物に恵まれる半農半魚の島である。昔から遠流の島であり、800 年前の承久の乱（1221）後、後鳥羽上皇が島流しされ、ここで生涯を終えたことで知られている。また明治時代の文豪、小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）が菱浦港近くで居住していたことから、もともと島には、「人を受け入れもてなす土壌と文化」がある。2021 年現在、町の人口は 2,353 人である。

年間に生まれる子どもは約 10 人。人口の 4 割が 65 歳以上の、超少子高齢化の過疎の町であり、大手のコンビニはない。しかし、この 10 年間で約 400 人の、I ターン（移住者）、U ターン（帰郷者）を生み出し、これは島の全人口の 20% 余りの数である。独自の行財政改革と産業創出によって、新しいカルチャー（文化）が芽生えつつあり、日本で今、最も注目される島の一つである。島根県の七類港（松江市）からフェリーでおよそ 3 時間、菱浦港に降り立つとまず目に入るのは、「ないものはない（隠岐國海士町）」という横断幕である。これは「なくてよい。大切なものはここにある。」という海士町の生き方を発信するロゴマークということである。（図 1）

3-2. 隠岐島前高校について

少子高齢化が急速に進む中、日本の全国各地で学校の統廃合が進んでいる。特に深刻なのが、離島や中山間地域（山間地及びその周辺の地域）の学校だろう。そんな中、廃校の危機にありながら、たった 10 年で全生徒数が 2 倍へと増加した学校がある。それが、島根県立隠岐島前高校である。

島根県の北 60 キロ、日本海に浮かぶ隠岐諸島の中の島前地域（西ノ島町、海士町、知夫村）唯一の高校が隠岐島前高校であり、海士町（中ノ島）の菱浦湾を望む港の高台にある。島後にある隠岐高校の分校としてスタートした同高校は、その後、地元の熱烈な応援により、独立を果たした。一時は生徒数の減少により統廃合の危機に瀕したが、地域と学校が協働して「高校魅力化プロジェクト」を推進し、離島・中山間地域では異例の学級増を果たした。

現在では、地域と世界の繋ぎ手となる「グローバル人材」の育成を目標に、島前地域の教育課題や教育資源を活用した「地域生活学」「総合的な探究の時間（夢探究）」「グローバルヒストリー」などの探究学習や、シンガポールやブータンでの海外研修など、生徒たちが様々な場面に挑戦できるカリキュラムを提供して取組を進めている。グローバルは「グローバルとローカルを掛け合わせた言葉（造語）」であり、同高校では「都会センスと田舎センス」と表現している。そしてここには、現代社会で希薄になりつつある、人同士の繋がりや温もりなどの教育的価値が存在している。

3-3. 隠岐島前教育魅力化プロジェクトについて

2008 年、高校統廃合の危機を回避するという課題解決のため、生徒が行きたい、保護者が行かせたい、地域が活かしたい、そんな魅力的な学校をつくることをめざし、同高校と地元三町村が協働して始めたのが、「隠岐島前高校魅力化プロジェクト」である。以来、島前地域が一丸となって連携して取り組みを進めてきた。2016 年には名称を「隠岐島前教育魅力化プロジェクト」に改称し、対象を地域全体へと広げた。現在も、魅力的で持続可能な学校と地域を創出するべく、継続して活動が続いている。

最近の 10 年間で、地域と学校を繋ぐ高校魅力化コーディネーター職の設置、全国から生徒を募集する島留学制度、教育寮や島親制度の整備、公立塾（町営塾）である隠岐ノ國学習センターの設立、地域課題の解決に取り組む探究学習（PBL）の構築、ICTを活用し対話を重視した教育など、「島まるごと学校、日本一の多様性の中で学ぶ」を合言葉に、地域での協働を大切にしながら独自の施策を展開した。生徒たちは学校から地域へ、地域から世界へと飛び出し、様々な視点で物事を捉え深めている。

その結果、89 人だった全校生徒数が 184 人までに回復（V字回復）した。さらに、地元中学校から隠岐島前高校への進学率も、45%から 77%になった。そして、それが若い世代の I ターン（移住者）、U ターン（帰郷者）の増加、地域全体の活性化という好循環を生み出している。（図 2）

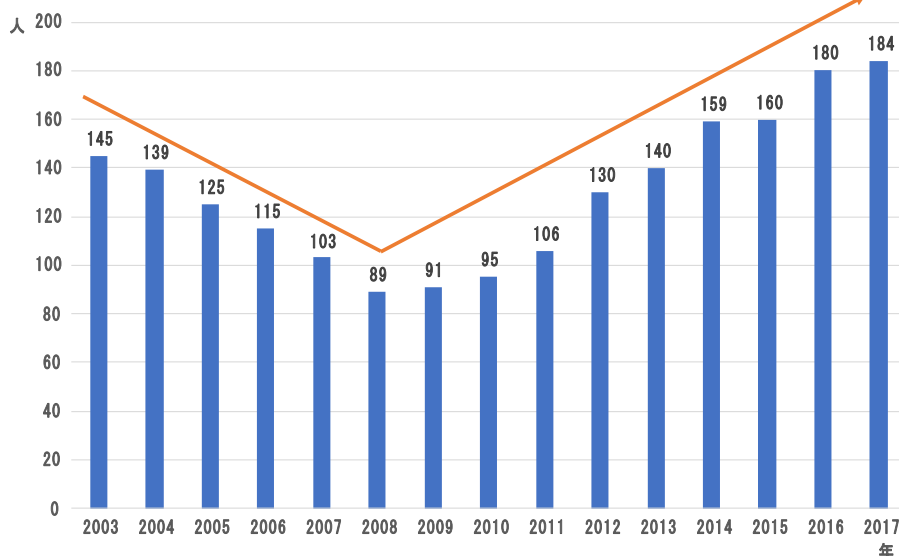
図1 海士町ロゴマーク



聞き取り調査資料より

著者引用（2021）

図2 隠岐島前高校生徒数の推移（人）



隠岐島前対話型オンライン学習会資料より著者引用（2020）

4. 研究対象（隠岐島前教育魅力化プロジェクト）の分析

4-1. 概略

隠岐島前高校は、文部科学省が進めるE S D（持続可能な開発のための教育）の事例として取り上げられている。さらに町単独予算で前述した「高校魅力化コーディネーター」の設置、更には全国初の「学校経営補佐官」が設置されている。このように様々な観点から学校づくりの事例として参考となる点が多数ある。また、この取組で注目すべき点は、教育での魅力化の取組が地域の意識を高め、経済などを巻き込む地域全体の魅力化に繋がっている点である。人口減少時代を迎える日本が、いかに魅力化し活性化していくかについてのモデルケースとして参考にしていくべきものであろう。このように同プロジェクトの目的は、「隠岐島前高校を核とした地域づくり」であり、教育の格差を是正して、「魅力的で持続可能な学校と地域」をつくる所にある。この目的が生まれてきた背景としては、次のような問題があった。

第一は、「少子化」—15歳人口の減少であり、「流出」—2008年には島前三島の中学校卒業生の内、49人中28人しか同高校には入学せず、21人の流出があったという問題である。これにより地域から高校がなくなるという危機、また子どもが本土の高校へ入学すると3年間で約450万円の保護者（親）の負担が生じるという問題、学校がなくなるのは病院がないよりも大きいという危機感、高校の管理職には「離島へ行く魅力がない。」という意識などが生じていた。

第二は、「学校の存続化運動」より「魅力化プロジェクト」で課題解決をしていく方向性

である。つまりこの問題を町・人づくりの盲点から拠点へとしていく、入学者の50%を島前地域内から50%を島前地域外（島留学）から募集する、県立高校であり管轄の壁があるにも関わらず、町独自で高校魅力化コーディネーターを設置するという構想が生まれた。これは先に述べた、「ないものはない」という海士町独自の精神、つまり学校存続の危機を地方創生の好機へと変えて行こうとする、逆説的な発想から生まれてきたと考えられる。

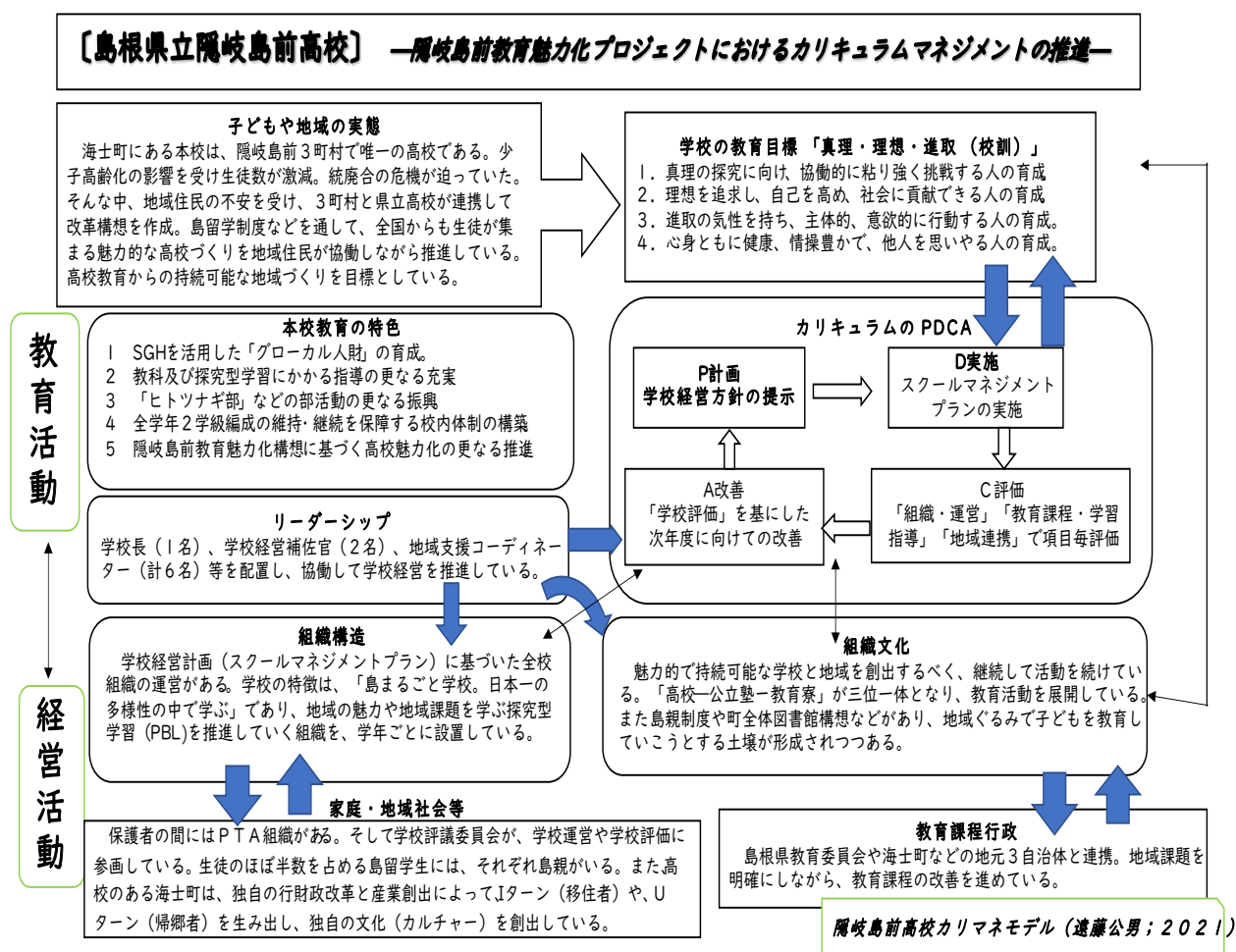
私は、地域での関係性を作り、協働を大切にしながら独自の施策を展開している同プロジェクトの中で、特に「高校—教育寮—公立塾」三者それぞれの状況や、同高校を中心とした「カリキュラム構想」などを、取組ごとに確認しながら分析を進めた。

4-2. 隠岐島前高校のカリキュラムマネジメント

カリキュラムマネジメントとは、カリキュラムを主たる手段として学校の課題を解決し、教育目標を達成する営みであり、同高校の最大の魅力は地域資源を活用した探究学習である。（図3）

図3 カリキュラムマネジメント・モデル図

田村 2009 を参考にして著者作成（2021）



4-3. 探究学習

探究学習である「地域生活学」などでは、地元地域を教材にした授業を展開している。(表1)
具体的には、地域の優れた人材を講師に招き地域に出かけて地域の魅力や課題を学び、解決方法を探り実践する。「地域観光プランの作成」「地域ビジネスプランの作成」「地域課題解決の立案」「地域商品の企画」などがある。子どもが隠岐島前地域を学ぶことの先には、島根県や日本そして世界の課題とその解決策を学ぶことを視野に入れている。

また、PBL(課題解決型探究学習)については、高校での「夢探究(総合的な探究の時間)」などや、公立塾での学習「夢ゼミ」の両方で用いられる方法である。これは、学習者が少人数のチームを組んで自ら課題を設定し、リサーチや実践を通して解決していく学習法である。PBLにおいては、選ぶ課題が現実在即していること、多くの人の興味を誘うテーマであることが重要視される。学習の主体はあくまで子どもで、教員は適切な事例の提示や、基本的な解説などの学習支援をするファシリテーターとなる。実際にPBLを用いた授業を受けた子どもは、通常の授業を受けた場合に比べて、事実をより正確に理解しており、批判的に思考する力と自信が向上している。このように「PBLは学習者が実社会に存在する課題解決に取り組むことで、協働的な姿勢や課題発見・解決能力を育むことを目指す。」とされている。(中村 2019 pp.104-105)

表1 「地域生活学(地域学)」などの年間計画実施例

	1年目	2年目	3年目
1学期	■講義 ・自然、地理(4時間) ・歴史、文化(4時間) ・産業、経済、観光、定住、交流(6時間) ・教育・福祉(4時間) ■期末テスト ■期末後探究学習開始	■講義 ・自然、地理(4時間) ・歴史、文化(4時間) ・産業、経済、観光、定住、交流(6時間) ・教育・福祉(4時間) ■期末テスト ■期末後探究学習開始	■講義 ・自然、地理(3時間) ・歴史、文化(3時間) ・産業、経済、観光、定住、交流(4時間) ・教育・福祉(2時間) ■講義を3分の2とし、その分4月から探究活動開始
2学期	■探究活動 ■地域の方へのプレゼン	■探究活動 ■シンガポールでのプレゼン ■地域の方へのプレゼン	■実践 ■シンガポールでのプレゼン ■地域の方へのプレゼン
3学期	■実践 ■論文	■実践 ■論文	■実践 ■論文
テーマ	■教師が設定したテーマから選択。第1希望から第3希望まで。テーマごとに定員有。	■生徒全員で自分が取り組みたいテーマをプレゼン。共感を集めた上位5つのテーマにする。	■チーム決定後に、チームでテーマを決める。
チーム	■生徒の希望したテーマになるように教員が割り振り。生徒のバランスを考慮しつつ。	■各チームの人数が4～5人。島内生、島外生、男女が一人ずつ入るよう生徒同士で決める。	■各チームの人数が4～5人。島内生、島外生、男女が一人ずつ入るよう生徒同士で決める。
担当	■各チームに担当教員	■各チームに担当教員	■担当教員は5人で5チームを見る。
その他	■週3時間	■週3時間	■週3時間 ■毎週水曜日の6～7時間目を連続にして地域に出やすくする。

毎年、取組に応じて変更されている。(『地域協働による高校魅力化ガイド』p.107を著者が一部改訂)

4-4. 教育寮について

教育寮は学校の敷地内に建っている。島留学生の全員が入寮していて、学校まで歩いて3分の距離にある。男子寮である三燈寮（さんとうりょう）と、女子寮である（鏡浦寮（けいほりょう））に分かれ生活している。男女とも「自主・自立」という言葉のもと、生徒が主体となって住みやすい環境をつくっている。部屋は4~6人部屋で、先輩・後輩が分け隔てなく同室で協働しながら、規律正しい生活を送っている。食事は、3食とも栄養バランスの取れた内容である。3食の献立を生徒が立てることもある。平日の朝晩は寮の食堂で食べ、昼は学校へお弁当を持って行き、教室や校庭などで食べる。学習時間は、授業内容や課題でわからないところを先輩や舎監の先生に聞くこともできるし、生徒同士教え合い、学び合いながら勉強している。

隠岐ノ國学習センターに通っている生徒が多く、そこでセンタースタッフに質問をすることができる。また、毎日決まった時間に勉強をすることで学習習慣をつけることができる。ベッドの空き状況にもよるが、島内出身の生徒が短期的に入寮することも可能である。年に数回、寮生の企画で島民の方々とバーベキューなどをして交流している。地域のお祭りなどの際には、寮生自らが企画し、仲間を募って出店をすることもある。

4-5. 公立塾について

取組における核の一つである隠岐ノ國学習センターは、隠岐島前高校と連携した公立塾（町営塾）であり、古民家を高校生のデザインでリニューアルした施設で、様々な工夫を凝らしており、とても落ち着いた快適な学習施設である。高校の寮からも近く、自由に自習できる空間や学習図書などが整備されている。学習センター職員には多彩なスタッフが揃っており、高校教員や中学校教員と協力しながら生徒の学習支援を行っている。スタッフは全員（町職員）が島外出身者であり、多様な意見を出し合いながら、働きやすい職場環境を形成している。職場組織は透明性が高く、少人数（10名）であることもあり、組織の動きを全員がよく把握している。また同僚との関係性も良好で、全員がワークライフ&バランスがとれている。（表2）

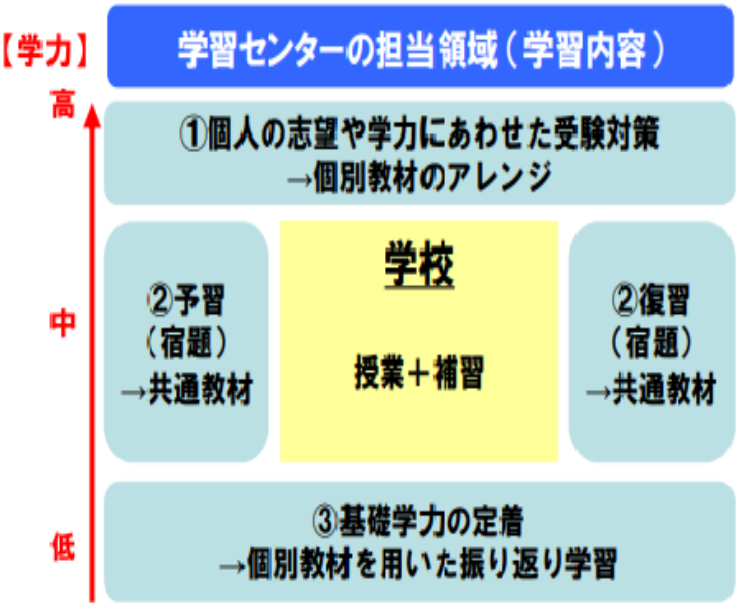
学習センターは、離島の過疎地域が抱える都市部との教育格差の解消や、生徒たちの自己実現をサポートすることを目的に、2010年に町の空き家を借りて開設された。4年後、通塾生が増え施設が手狭になったため、より同高校に近い場所に移転した。2021年現在、島留学生（寮生）のほぼ全員と島内生の7割程度の、計130名が通塾している。生徒は、高校の授業や部活動が終わった後、そのまま学習センターへと向かう。月謝は、1・2年生で月額1万円、3年生で1万2千円である。

同高校では授業形式だが、学習センターでは一人ひとりが学習目標を立て、学びのPDCAを回していく「自立学習」の仕組みを構築している。つまり、自分の目標に合わせて学習の計画を立てて実践し、振り返って次の計画に生かすという一連の流れが主体的に行えるようになる。自分で学習ができるようになるうえ自分に合った学習を進めていける点は、大学受験を考える生徒にとっても安心だろう。このような「自立学習」としての教科指導の他に、「夢ゼミ」という対話や質問づくり、あるいは実践形式で、自分の興味や夢を明確にしていく探究学習のカリキュラムも魅力の一つである。1・2年生では月1回、多様なゲストを迎えて地域の課題の解決を考えるゼミに参加でき、3年生になると週1回、自分で設定したテーマについて発表したり実践を通して探究したりする場に参加できる。これらは進路実現の礎になっている。

このように学習センターは、隠岐島前高校と連携・協働しながら、島前地域で対話的、実践的、探究的に学び続ける場として、「自ら学ぶ」「チームで協働して学ぶ」「社会や地域と共に学ぶ」の三点を目標として活動している町立（公立）の組織である。前述したように、学習は「自立学習と夢ゼミ（PBL）」の二本柱で構成されている。そして「自分で学ぶ、個に寄り添う、チームで学ぶ、人と関わりながら学ぶ。」を学びの在り方として、「質問づくり」の探究方法などを用いながら、様々な問題にチャレンジしていく姿勢を大切にしている。（図4）

図4 隠岐ノ國学習センター（公立塾）の役割

表2 公立塾の組織に関するアンケート分析



「夢ゼミ（課題解決型探究学習）」＋「自立学習」の実施

◎ ▲	隠岐ノ國学習センター (公立塾)
◎強み	仕事への興味
	仕事の達成感
▲改善点	学習規律（子ども）
	コミュニケーション（保護者）
	コミュニケーション（地域住民）
◎強み	組織の透明性
	同僚との関係性
	組織の動き方
	ワークライフ&バランス
▲改善点	自分のストレス
	仕事の時間
	管理職の対応
	管理職からの支援

隠岐島前対話型オンライン学習会資料から著者引用 (2020)

職場アンケート資料から著者作成 (2021)

4-6. カリキュラム構想

同プロジェクトは、2019年4月に「第三期；隠岐島前教育魅力化構想一意志ある未来のつくりかた」を発表し、魅力化計画は新段階に入っている。例えばここでは社会福祉法人を用いたふくぎ茶の栽培、制作など、障害者と健常者の共同（インクルージョン）を進めている。また、関係人口構築のために、大人の島留学や親子島留学の取組、島での子育て探究、埼玉県と島根県の連携（人材交流）などを進めている。目的は島の未来を担う人づくりである。

私は、カリキュラム構想として、次の九点が挙げられると考えている。（表3）

表3 隠岐島前教育魅力化プロジェクトにおけるカリキュラム構想 著者作成（2021）

学校のカリキュラム

1	地域資源や地域課題を活用したカリキュラム（「探究学習」） — 「やりたい」×「できる」 地域課題としては少子化、高齢化、後継者不足など、現代日本の過疎地域の縮図のような問題がある。課題解決のためには、島全体が「学校」、地域の人も先生、ICTも活用してグローバルに学ぶ必要がある。このためには、地域資源や地域課題をチームで探究・実践して、三町長なども含めた地域の人に、学びを発表する機会を設定する。方法は、PBL（プロジェクト・ベースト・ラーニング）を基盤にした学習である。PBLは「課題解決型探究学習」であり、自ら設定した課題、または与えられた課題を解決していく過程で、様々な能力を育成する学習である。
2	ICTを活用した遠隔授業 現在宮崎県の高校などを始め、ICTを使って各地と交流している。コロナ禍で全国一斉休校であった昨年も、ネットワークを活用して寮や家庭にいる生徒とオンライン学習を行っていた。
3	グローバル人材の育成 — 「グローバル」×「ローカル」 同高校は現在、SGH（スーパー・グローバル・ハイスクール）の指定を受けている。これはまず、地域「へ」飛び出す機会を持つ。ここでは地域へ出て探究学習で調べた課題をまとめ、「町づくり甲子園」で全国の高校生たちと交流したりする取組をしている。そして自らの情報を狭めるチャンスとしている。次に、地域「を」飛び出す機会を持つ。これは、シンガポールの大学での課題研究発表で、英語でプレゼンする機会を持っている。さらに、「グローバル探究」として、地域に愛着が強いブータンやロシアについて探究的な学習をしている。そして新たな自分の発見に繋げている。

学校制度

4	多様な交流から生まれる多文化協働高校生活（「島留学」制度） — 「日本一の多様性」 当初、「少子化」は固定化していた。しかし「島留学」制度を始めると、やる気と多様性のある現在30都道府県、海外（ドバイ等）からも入学者が集まった。また当初は、寮費・食費の補助があったが、現在は実費（3年間450万円程度）負担を、保護者に依頼しても入学者が集まるようになった。島留学については、全国での説明会以外にも口コミで広がっている。そして目標は、「受験型」から「探究型」への学習形態の変化である。
5	教育寮の充実 同高校の敷地内には、男子寮である三燈寮（さんとうりょう）と、女子寮である鏡浦寮（けいほりょう）がある。寮は安心、安全が提供される「家」とすると同時に、主体性、協調性、課題解決能力といった能力を育む「教育寮」として、多様な成長が得られる全人教育の場となっている。「みんなで作る島家、いつでも還れる島家」をコンセプトに、全国各地から集まった生徒たちが地域と密接に関わりながら主体的に寮運営を行なっている。ハウスマスターという大人が、寮生と共に生活をしながらメンターとして相談にのり、生徒たちによる寮の自主運営をサポートしている。
6	地域の担い手を育てる公立塾（町営塾） — 学校地域連携型公立塾；隠岐ノ圏学習センター 地域には当初、離島ならではの「学力格差」があった。隠岐ノ圏学習センターは古きに価値を持つ民家跡を改築して建っている。ここに意欲ある多彩なスタッフが集まり主に①自立学習の支援、②夢ゼミ（探究学習）を実施している。これは学年ごとに内容が違い、主に、1年「地域からの学習課題設定」、2年「シンガポールの大学における英語でのプレゼン」、3年「進学に向けての意識付け（キャリアについて）」などである。時には地域の大人が先生になることもある。また同高校「ヒトツナギ部」の部活動とも連動している。

島の環境

7	島親制度 島留学生には地域と関わるきっかけとして「島親さん」を一人ひとりにつけている。ホストファミリー的な存在として、島前三町村の20代から70代の100人程度の方に関わってもらっている。休日に家を訪ねて、畑や畜産の手伝いをさせてもらったり、一緒に料理をしたり、普段はなかなかできない船上の海釣りを体験させてもらったりと、学校だけでは経験できない、地域ならではの貴重な経験をさせてもらっている。卒業後も交流を続け、島親さんを訪ねて来島する生徒も多数いる。島親の皆さんは、同高校になくてはならない存在である。
8	島まるごと図書館構想 以前の「図書館のない島」というハンディキャップ（課題）を逆に生かし、島の保育所や学校（小・中・高）を中心に、地区公民館や港などの人が集まる既存の施設を図書分館と位置付け、それらをネットワーク化することで、島全体を一つの「図書館」とする構想である。これは、町の存続の危機を乗り越えていくためには、持続可能な地域社会を造る力である人間力が必要であり、図書館教育を「人づくりの柱」にするために2007年から始まり、今年で15年目を迎えている。現在、分館数は菱浦港ブランチ、後鳥羽院資料館、各地区公民館など20か所、返却ポストは町内7か所にある。また、町内各学校には図書館司書が設置されている。中央図書館には、町の人口規模から考えてみても素晴らしい数や種類の蔵書があり、長期休業中には学生たちが読書したり宿題をしたりしている。

実施体制

9	高校魅力化（地域支援）コーディネーターの設置 ー地域との協働 コーディネーターは、学校と町、地域の上に立つ中間的な存在であり、多様な人々をつなぎ、世の中の動きを捉え、学校や地域の魅力を形にしていけるのが仕事である。2021年現在、隠岐島前高校には、町の予算で、計6名が配置されている。
---	--

学校を含む地域の教育魅力化を進めていくために、同プロジェクトは結成されている。高校の魅力化から持続可能な地域づくりというのが、隠岐島前教育魅力化プロジェクトの目的であることを確かめた。（表4）

表4 教育の「魅力化」 隠岐島前対話型オンライン学習会資料から著者引用（2020）

これまでの「標準化」された教育（日本の縮図） 教育格差、都会の担い手育成 ➡地域から人が出ていく ➡子どもや若者の流出、後継者不足 ➡人口減少、少子高齢化、文化や産業の衰退。
これからの教育（学校も含む）の「魅力化」 魅力的な教育の実践、教育のブランド化 ➡地域に人がとどまる ➡子どもや若者の移住、後継者や担い手の増加 ➡地域の魅力化、文化継承や産業創出。

5. まとめ

5-1. 自治体（海士町）の魅力化

隠岐島前高校は、教育魅力化プロジェクトによって生徒数の増加を果たした。そして、地域課題に対しての探究学習を進めていく中で、自治体にも好影響を与えている。

第一は、人口減少の一定の歯止めである。例えば2020年は2,374人で、2021年は2,353人の町人口の推移が見られる。第二は、経済の活性化である。「魅力的で持続的な島の未来のために、人づくりと仕事づくりの好循環を図る。」ことを目的として、地域資源を生かした仕事づくりへの挑戦や観光振興などに力を入れている。第三は、関係人口の形成である。都会から地方への「人材の還流を促す」という目的で、海士町では前述したように大人の島留学、子育て探究、埼玉県との人材交流などを企画している。

5-2. 成果と課題

関係人口構築に関わるこの取組のきっかけになったのが、2009年に、観光プランを競う第一回観光甲子園で、隠岐島前高校生がつくった「ヒトツナギ」がグランプリを受賞したことである。「ヒトツナギ」は、よくある観光地ではなく、地域住民との繋がりを紹介するという観光プランで、ここには地域外から入学してきた子どもたち（島留学生）の視点が生きている。ヒトツナギ部としての活動（部活動）は、同高校の大きな魅力の一つである。現在、島の新しいホテル（Entô）観光事業に、「島のチェックイン」という活動を通して、来島者に地域の魅力をプレゼンするという取組を行っている。「関係人口とは、定住人口でも交流人口でもない新たな地域外の主体を指す。」（田中 2021 p.13）

同町役場交流推進課のKさんは、海士町の取組の特徴として、例えば「マルチワーカー制度」による働き方の創出を挙げている。これはIターンやUターンした若者の将来を見据え、春（牡蠣の養殖）、夏（観光）、秋（塩ファーム）、冬（畜産農家）などと季節に応じて違う仕事に就労し、体験を積みながら自分の適性を考えるという島ならではの独特なシステムである。

また、同町役場人づくり特命担当課のHさんは、島根県の教育について、「特に離島の教育について、もっと考えてほしい。」とした上で、同プロジェクトがコミュニティスクールの形成に繋がったとしている。その原動力となったのは、少子化、高齢化、人口流出などの日本の過疎地域が、どこでも同じように抱える問題への強い危機感（切実性）であるとしている。そして今後も、「同町に人を惹きつける魅力を創造し、同高校の卒業生や、滞在人口、関係人口などを増加させて、関係性（人と人との繋がり）を保っていくことが重要である。」と述べている。

島留学生のMさんは、「同高校ではあらかじめ用意されたカリキュラムを行っている。」とした上で、探究学習の重要性を強調した。それは探究学習で地域に触れ地域課題に関わる中で、「島の子」と「島留学の子」の間にある違いが明確化するが、この問題を克服していく過程での対話や質問などから深い関係性が生まれる。「この関わり自体が自然な形態の多様性（混ぜる事）であり、同高校の教育目標であるグローバル人材育成に繋がっている。」と述べている。従って、グローバルとは「グローバルとローカルが合わさっている形態である。」と言える。

現在、全国的に展開されつつある高校魅力化プロジェクトは、論述したように「学校—教育寮—公立塾」が三位一体となって構成されている点や、探究学習をコアとしたカリキュラム構想が大きな特徴であるといえる。私は、共同体として学校と地域が対話し、協働しながら取組を進めている「地域コミュニティへ広がる学校」の成果として、特に次の三点を指摘したい。第一は、学校が地域に開かれていて協働のチームがあること、そしてコーディネーティブに

動く人たちがいる体制があること。第二は、地域課題も教育資源として捉え、子どもたちが町づくりや地域を舞台にしたプロジェクトに挑戦していける学習環境を構築していること。第三は、他の学校や地域ともコラボレーションしていることである。

課題としては、少子高齢化地域の未来を切り拓くモデル事例として、今までの実践を検証し取組を社会へ還元していく必要があるという点である。今、高校の 3 年間を離島や地方で学ぶ「地域みらい留学」が注目され、「しまね留学」なども始められている。自然豊かな環境で学べるほか、寮生活やホームステイを通して思いやりや自律心、行動力を身に付けられることは、大きな魅力ではある。しかし同町への移住者定着率は約 50%である。従って同プロジェクトは、「成功事例ではなくあくまで挑戦事例である。」といえる。

5-3. 結論

「くると 180 度振り向いたら最先端にいた。」これが魅力化の高校での取組で、よく聞かれる言葉である。つまり「振り向かなければ最後尾、振り向けば最先端。」ということである。同プロジェクトには「分配・所有から表現・生成へ」という教育的価値観の転換が見られ、「身体性（人の社会的存在の固有性）の再生」が内在する。「身体性」とは「時間と空間を占め、時間と空間によって規定される個人の存在のあり方。」をいう。また地域は、「一定の意味を有する空間的まとまり。」と捉えることができる。ここから、同プロジェクトはコミュニティスクールであるといえるのではないか。「学校をコミュニティスクールとして形成するとともに、地域社会をスクールコミュニティとして位置づけ、学校を基本として、学びを地域コミュニティに広げていくことで、産業を創る人材を輩出し、地域を永続化していく志向性が明確化されること。」が指摘されている。（牧野 2015 p.212）

私が、フィールドワークを通じて体感したことは「人と人との繋がり（ヒトツナギ）の素晴らしさ＝協働」であった。「学校」は「人」と繋がる場所であり、共同体（コミュニティ）である。それを「まんざらでもない。」と子ども自身が感じられることが最も今、大切とされるべき視点であり、論点ではないかと考えている。

引用文献・参考文献

- ・田中 輝美（2021）『関係人口の社会学』大阪大学出版会，pp.9-24 pp.125-164。
- ・中村 怜詞（2019）「社会に開かれた学びをつくるカリキュラムマネジメント」地域・教育魅力化プラットホーム編『地域協働による高校魅力化ガイド』岩波書店，pp.102-121。
- ・牧野 篤（2015）「社会における学びと身体性—市民性への問い返し／社会教育の視点から—」東京大学教育学部カリキュラム・イノベーション研究会編『カリキュラム・イノベーション』東京大学出版会，pp.195-214。